

高校野球の練習で傷んだ硬式ボールを座間市内の障害者施設が補修し、評判を呼んでいる。プロ野球・横浜大洋ホエールズ投手だった大門和彦さん(47)が考案した「エコボール」という取り組みに加わった。糸が切れ、革がめくれたボールを通所者が一針一針手縫いし、再び命を吹き込んでいく。堅実な仕事ぶりが評価され、修理を依頼する学校が増えている。

(山元 信之)

座間市緑ヶ丘のNPO法人「きづき」の事務所。赤い縫い糸が切れ、泥で汚れ、革が剥がれたボールが山になっっている。精神障害者の女性2人が傷んだボールの籠を前に黙々と針を動かす。金づちでどんとどんとたたき、形を整えると一丁上がりだ。

大門さんは現在、京都でコンサルティング会社などを経営する。4年ほど前、母校の府立東宇治高を訪れると、倉庫に傷んだボールの山を見つけた。革をはぎ、芯をビニールテープでぐるぐる巻きにしてトス打撃などに使うくらいしかない。ピッチングマシンにかからず、ノックにも使えない。1球500〜千円はするというボールの末路が哀れだった。

座間の障害者施設

傷んだ白球 手縫いで再生

高校野球部の依頼続々

た。ちょうど障害者施設を運営する知人に通所者に何か仕事がないか、相談されていた。「これなら」。さっそく、この施設に母校を紹介

介。エコボール事業が始まった。昨年春、評判を聞きつけたのが「きづき」だった。縫い方は近頃のスポーツ用品店に教えてもらった。現在、精神的な障害のある男女10人ほどが作業する。県立座間総合高を皮切りに、座間高、大和高と依頼が広がってきた。

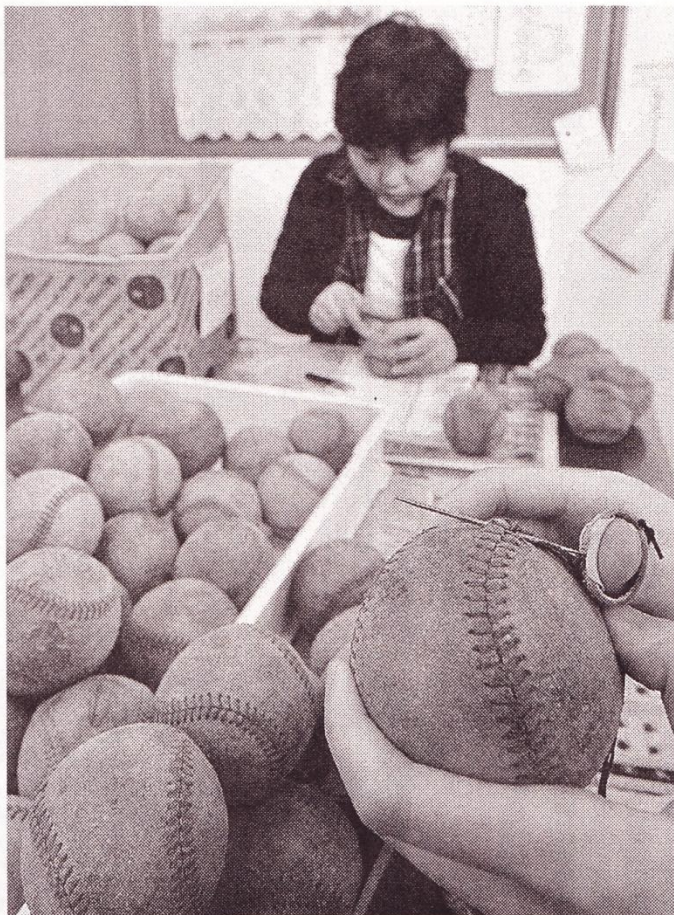
強豪校の横浜隼人高もその一校。水谷哲也監督(48)は話す。「通常ならば半年くらいで使えなくなってしまうが、修理してもらえば、そこから3、4カ月使いうことが出来る」

同法人の岩田文子代表(62)は「自分たちが補修したボールを高校生が練習に再び使う。何より環境に優しいし、通所者が社会とのつながりを実感することができる」と期待を寄せる。課題はお金だ。1球直すのに最低でも20分はかかる。1球50円の修理費では人件費にもならない。同法人は糸と針の提供を呼び掛ける一方、工賃を支援してもらおうと個人1口千円、企業・団体1口3千円からの協賛金も募集している。

通所者の女性(32)は作業の手を止めて話した。「こんなに汚れるまで選手たちには練習しているなんて知らなかった。夏の甲子園の予選が始まったら、球場で応援してみたい」

元大洋・大門さん仲介

元大洋・大門さん仲介



傷んだボールを手縫いし、命を吹き込む障害者
＝座間市緑ヶ丘 (吉田 太一写す)